

ドーピングは本当に悪なのか - トップアスリートとアマチュアスポーツ選手のスポーツ観の違いから探る -

Is the dope really bad?
- Searched from the difference of top athlete and amateur sports

1K04A087-8
指導教員 主査 太田章先生 副査 友添秀則先生
小島 大地

序章

今年の10月には陸上女子短距離の元女王マリオン・ジョーンズ(米国)がドーピング違反を認めたり、11月には女子テニスで元世界ランキング1位のマルチナ・ヒンギス選手(スイス)がドーピング検査でコカインに陽性反応を示したことを明らかにするとともに現役を引退したりと、ドーピング問題は後を絶たない。ドーピングはトップレベルの世界では必ずおこなわれている可能性がある。そもそも健康面への配慮から禁止されたドーピングについて、医療技術が発達した今ドーピング解禁論を唱える人がある程度いても良いのではないかと感じている。それにも関わらずドーピング解禁論を唱える人は少ない。今後のドーピング問題の解決の一步となるように、ドーピング解禁論の意見を整理しなおしてみる。

第1章

まず基礎として現在のドーピングの定義、ドーピング禁止薬物の種類・作用と副作用、ドーピング検査の方法、制裁措置についてまとめる。ドーピングが薬物を用いるものである以上副作用を必ず伴うものであることを確認する。

第2章

ドーピングの歴史について年表形式で見てみる。最初のドーピングは競走馬へのものであった。これが次第に人間側に拡がっていった。死亡事故が増えるのを機にドーピングが禁止されるようになる。今では血液ドーピングなどの新しいドーピングが問題になっている。

第3章

日本アンチ・ドーピング機構(JADA)が挙げるドーピング禁止の4つの根拠(選手自身の健康を害する、不誠実、社会悪、スポーツ固有の価値を損ねる)について検討を加える。自己決定権やスポーツの価値という言葉の再定義を用いこれらについてひとつずつ検討を加えていくと、ドーピング禁止の根拠はとて弱くことがわかる。それにもかかわらずドーピング禁止が謳われているのが現状である。

第4章

JADAが挙げるドーピング禁止の根拠以外にもよく言われている根拠がある。それらの根拠(使用量の限度をどのように決めるのか、ドーピング公認大会は人気があるのか、また反ドーピング大会との共存は可能か、ドーピングは人間の機械化ではないか)についても検討を加えてみる。これらに検討を加えてみるとトップアスリートとアマチュアスポーツ選手のスポーツに対する考え方の違いが見えてくる。

第5章

第4章で見えてきたトップアスリートとアマチュアスポーツ選手のスポーツに対する考え方の違いについてさらに考察を深める。まず実際の使用状況を調べてみる。実際のドーピング検査の陽性率を超えた割合でドーピングが行われている可能性が高いことがわかる。次にドーピングに関するアンケートから、トップアスリートとアマチュアスポーツ選手のスポーツに対する考え方を探る。トップアスリートの中にはドーピングをしたいと考えている人が多数いる一方、アマチュアスポーツ選手からすると、ドーピングは勝敗を決める上ではアンフェアだ、となる。では果たして勝敗はスポーツの本質なのだろうか。スポーツの本質とは卓越性の追及であって、勝敗とは関係ない。勝敗とはスポーツを面白くするシステムでしかない。以上見てきたように、アマチュアスポーツ選手は勝敗がスポーツの本質ではないにも関わらずそれを理由にドーピングを排除しようとしている。人と競い合うのもスポーツであれば、自分自身を超えようとするのもスポーツなのである。

終章

以上見てきたようにドーピングが悪であるとする根拠は見つからない。それにも関わらず一般人が誤解しやすい根拠を並べ立ててアンチ・ドーピングを謳っているのが現状である。今まではドーピングがタブー視されてきたので、一般人がドーピングの正しい知識を得る機会も少なかった。これからは少しでもドーピングの正しい知識を広めていき、ドーピングに対する偏見をなくしていくことが重要である。